

金、銀、ドル、ルピー

幕末の日本から大量の金が流出したのは、金銀比価が日本と外国では大きく違ったからだ。当時の金と銀の価格の比率は国際的に約1対16だったが、日本では1対4と銀の価格が高かったので、日本で銀貨を金貨(小判)に換えて、上海で金を銀に換えれば大儲けができた。ペリーは個人的にも大もうけした一人だ。

現在の金銀比価は1対58だから当時から見ればかなり銀の価格は下落したことになる。

金と銀の価格の相関性は高いが、金は投資手段あるいは価値の保存手段としての需要が高いが、銀は工業用の需要が多い。約半分は工業用だ。したがって銀価格は世界経済のパフォーマンスが良くなれば買われる傾向にある。

しかし金価格は必ずしもそうはいかない。

金価格は2年前に1オンス1920ドルの高値をつけてから伸び悩み、今年の4月と6月に大きく下げ、1オンス1200ドル近辺まで下落した。その後は戻り基調で最近では1400ドル水準で推移している。

金は基軸通貨ドルに対する不信や、リスク回避手段として買われてきた。また米国などの先進国の量的緩和政策が将来もたらずであろうインフレ懸念からヘッジファンドなどが大きく買い越してきた。

しかし金需要の旺盛なインドが金の輸入に対して課税をして輸入の抑制を図った。経常収支の悪化によるルピーの下落を防ぐためだ。インドと並ぶ大口需要先の中国も景気減速で金への需要が減った。また昨年夏以降ユーロ危機が沈静化に向かったことや、キプロスが銀行救済資金のため金を売ったことも、金相場を冷やすきっかけになった。

そして何よりも量的緩和政策がなかなかインフレに結びつかないことが金に対する興味をそいだ。金のロングポジションを投げたヘッジファンドも少なくなかった。ソロスもその一人だ。

今後の金の動向だが、一般的には米国の量的緩和の縮小はドル高に繋がり、金価格の下落傾向になると考えられる。インフレも当面は抑制された状態が続くと予測されるのでこうした見方が説得力を持ちやすい。

だが量的緩和の縮小やそれに続く金利上昇の世界経済や市場への影響は計りがたい。その不確実性は金の需要を支える。その点から見れば6月の安値を超えて下落することは考えにくい。むしろ下落してもそこまで(ダブルボトム)上昇に転じる可能性がある。